

プロジェクト発足に至った。

今年度は試験栽培の範囲をJA木野のほ場などにも広げ、学内ほ場は前年の約2倍の9品種とし、作業の省力化を図るための栽培法も探っている。同時に、収穫後に搾油など加工研究にも入る。

産地としてのブランド化を図るため、「TOKACHI Grand Nuts」の商標登録を申請中だ。来年度からはJA木野の農業者による栽培もスタートさせる。

28日午後、帯信金中央支店などで構成団体のトップが集まり、発表会を行った。

秋本准教授は「3年間で栽培を普及拡大させ、十勝が弱い加工技術を確立し、食卓への浸透を図る」とし、帯信金の増田正二会長は「若い人が地域に残れるよう活性化させるのが役割。加工度を引き上げることは、他の作物にも応用できることからモデルケースにしたい」と語った。

## デントコーン 台風倒伏 十勝は8000ヘクタール 道内被害の半分

2017年10月5日

道は5日、9月に北海道に上陸した台風18号による大雨と強風の被害状況をまとめた。農業では収穫期を迎えた飼料用トウモロコシのデントコーンが全道の約1万6000ヘクタールで倒伏し、うち半数が十勝管内で発生した。

台風18号で管内は、強風でデントコーンやスイートコーンが倒伏し、各地で畑の冠水が起きた。強風で幹が傾いたり折れたりしたデントコーンの面積は、管内で8000～8500ヘクタールに上った。倒伏しても収穫はできるが、時間がかかりロスが出るほか、土が付くと飼料の品

質に影響が出る。被害面積には減収にならない倒伏も含まれている。

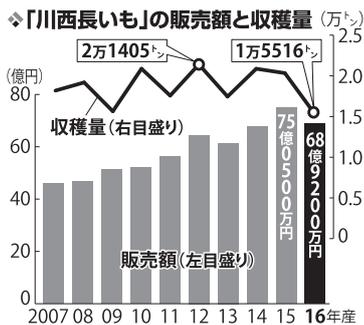
デントコーンに豆类など他の作物を含めた全作物では、道内で約1万8000ヘクタールで被害が報告された。全作物でも十勝は半分を占めた。

管内ではほかに、畜舎の屋根や壁が飛ばされる被害や、漁業では秋サケ漁の定置網が破損する被害も起きている。

## 川西長いも販売 歴代2位 2016年産69億円

2017年11月13日

管内で昨年春に植えた2016年産の「十勝川西長いも」の販売額が約69億円となり、過去最高だった15年産（75億円）に次ぐ過去2番目の水準に達した。台風の影響で収穫量は15年産から2割以上減ったものの、主要産地である管内と青森県がそろって不作となったことで品薄感が強まり、取引価格が上昇した。11月に収穫を始めた17年産は品質が良く、収量の回復も期待できるとの声が多い。



16年産の十勝川西長いもは昨秋に全体の6割を収穫し、残りを今春掘り出した。販売は10月末までにおおむね完了した。収穫量は1万5500トンと15年産に比べて24%程度減少した。

収量減は、今年の台風で大量の雨水が土中に入り、ナガイモの生育環境が悪化したため。収穫できたナガイモも期待通りの形にならないものが多く、単価の低い「C品」の比率が過去に例がないほど高かった。全体の収量が落ち込み、輸出も15年産の3000トン弱から1700トンに減った。

### 品薄で価格上昇

ただ、管内と並ぶ産地の青森県でも作柄が悪く、取引価格は上昇。C品でも一時、単価が通常の2倍近くに高騰したという。この結果、収量は過去10年で最低水準だが、販売額は15年産に次ぐ高水準となった。JA帯広かわにしは「農家の収入減が最小限にとどまり、生産意欲が大きく減退することはなさそうだ」と胸をなで下ろす。

管内の十勝川西長いもの作付面積は約540ヘクタール。17年産から栽培を始めたJA鹿追町を含め、9JAが生産している。17年産の収量は平年並みで、特に形の良い「A品」が多いという。ナガイモは台湾や米西海岸などで健康食材として人気が高く、17年産は約3000トンを輸出に回す方針。